

テーマ

中世のお坊さんは何を勉強していたのか

適用分野

宗教と文学のつながりの理解、日本中世文学の理解

研究名称

中世の天台系仏書における説話の研究
中世寺院における知的体系に関する研究

氏名所属

田中貴子 教授
文学部 日本語日本文学科

内容

●特徴

中世の文学、特に宗教と文学の関係についての研究を行っている。中世のお坊さんにとっての主な学問は、一つには自分の勉強として行う仏教に対する注釈作業があり、また二つ目にはお坊さん同士の講話や俗人を対象とした法事などでの話をするところがある。寺院などに残された文献を見ると、注釈を付けられた内容には現代の感覚では理解し難く、「荒唐無稽」に見える内容が書かれていることがある。また講話や法事には、仏教の内容を解り易くするためにたとえ話などが多用されており、これは説話の元になっている。これらのことを文学の観点から見ると、どのように解釈できるのかを明らかにする研究を行っている。

●研究内容

お坊さん達の勉強のジャンルは、講話や法話など唱導のために必要と思われる領域に広く及んでおり、仏教だけでなく文学や歌の世界にまで踏み込んでいて、世の中の内容をよく把握していたと考えられている。従ってお坊さん達は、中世の知的な領域で、横の

つながりをつける役目も担っていたと言える。金沢文庫には、中世のお坊さんの資料が保管されており、そこには講話のマニュアルなどの記録が残っている。

また平安時代には国家の宗教であった天台宗も、中世になると、個人の願いを祈る個人宗教に変貌してきた。これは鎌倉の新興仏教が、個人信仰に傾いていたことと対応している。また仏画や仏像の製作にはもともと厳格なルールが存在していたが、中世になるとこのルールが崩れて変わった仏像の製作が盛んに行われるようになった。これは個人の願いに沿って、種々の仏像の製作が可能になったことによる。

中世という時代をキーワードにして、多彩な領域を文学という切り口で検証していく研究には、尽きせぬ知的興味がある。

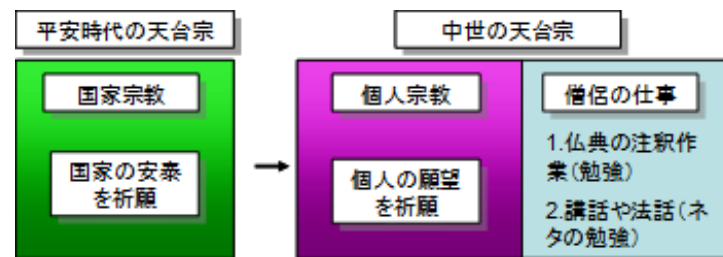


図 天台宗の時代による変貌

キーワード

中世、日本中世、仏教、宗教、寺院、説話、日本中世文学、宗教文学

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究